

# 市民力を掘り起こす『デザイン』の挑戦

ながれ

大西 悟 (おおにし さとし/国立環境研究所 福島地域協働拠点、  
元環境文明二十一 研究員)

いつの間にか私も専門家と呼ばれるようになりました。現在は研究者として福島県浜通りの復興まちづくりに取り組んでいます、原点は市民力の中にあります。

20年ほど前、大学院時代に東京・日本橋の学生団体の第1期代表として、首都高の地下化に伴う周辺地域のまちづくりに参画した経験が、今も仕事の指針となっています。そこで得た知見は、「地域のことは地域の人が一番知っている」という事実と、当時の意思決定層でも明確な将来ビジョンを持っていないという事実でした。そのため、市民と専門家が協力し合う『デザイン』手法の重要性を認識し、それを今でも追求しています。

本文は、個人の経験を基にしていますが、市民力を考えるきっかけになることを願っています。

## ●地域から学ぶ姿勢と時代の流れ

地域の方々から学ぶ姿勢は、その時に培われました。学生団体は、現在21期目へと引き継がれていますが、それを機に、町の方が神田祭の提灯に団体名を飾って下さいました。地域の方とともに考えた提案は、一部は実現し、今でも計画に引き継がれています。地域の知恵を尊重し、それを専門家としての知識と結びつけることで、社会に変革をもたらすことができると実感しました。

一方、当時の意思決定層との対話を通じて、彼らが長い目でみた将来ビジョンを明確にしていない点に気づきました。20年前の当時は、持続可能性やデジタル技術が注目され始めた時代です。しかし、その認識は、住民の方々だけでなく、意思決定層さえも、共

有することは容易ではありませんでした。会食の席で「難しい話はやめてくれ」と言われたときには、その壁の厚さを痛感したものです。おそらく私が建築や都市デザインのセンスがあったら、それも打ち破れたでしょうが、あいにくそうはいきませんでした。

## ●持続可能性と市民

その後、私はまちづくりの道を選ばず、将来のビジョンを研究することに専念しました。持続可能性について文献レビューし、その一部の著者と話もしました。市民力につながるアイデアは、地域の自立の文脈で論じられていました。ただ、持続可能性に関する議論は複雑でしたし、日本から発信は乏しく、がっかりしたものです。恩師の篠原修先生に相談したところ「加藤三郎さんという人が適任だから」と連絡を入れてくれ、かくして、環境文明二十一の門戸をたたき、入所にすることになりました。オフィスには、書籍が多く、「サステイナブル」について大いに研究することができました。ましてや、加藤所長とコノエさんの二人の家庭教師がいるわけですから、環境問題しかり、その歴史的な経緯や、その中で市民が果たすべき役割といったことは、英才教育を受けたわけです。

## ●市民と専門家が共に輪郭を描く

環境文明二十一では、グリーン経済や環境文明社会について、部会を通じて、会員の皆さん（一市民であり、なおかつ専門家）との対話を基に将来ビジョンを描き、政策提言に繋げるプロセスに参画しました。ここで、市民力がどのように発揮されるかをつぶさに体

験できたのは貴重でした。部会は、各々が市民と専門家のそれぞれの立場を使い分け、知識と経験を持ち寄り、徐々に輪郭を描き出していました。

しかし、当時の私は、対話を通じて共通の認識を築き上げるのは、決して容易ではないと感じていました。その難しさを理解するカギは、日本の持続性の知恵に関する研究でした。ここで私の心に残り、改めて納得したのは、中村元（1912～1999年）氏の（日本人は）「複雑な思考や抽象的・形而上学的思考を好まない反面、直観的・情緒的であって文芸的・芸術的な情緒が豊かである（『日本人の思惟方法』、1948年）」という指摘でした。

そして前者は環境教育によって高める課題であり、後者は地域に根差すことで強みが活きるだろうという認識に至りました。その後私は、後者に軸足を置くようになります。国立環境研究所に入所し、地域の資源循環やエネルギー効率を高める、より実践的な工学研究に力点を置き、専門性を磨いていきました。さらにその後、大学での教員も経験し、現在は再び、国立環境研究所で仕事をしています。環境に配慮したまちづくりを研究する中で、岩手県紫波町、岡山県真庭市などのケーススタディを通じ、市民と専門家の共創とそれを実現する『デザイン』の重要性を改めて示し、その強化策、応用方法を模索しています。

### ●福島県浜通りでの復興まちづくりの挑戦

今、私は福島県大熊町でのゼロカーボン推進による復興まちづくり支援に携わっています。この町は、東日本大震災および原子力災害により全町避難を経験し、廃炉や中間貯蔵施設を抱える中で、ようやく一部地区で復興が始まった地域です。住宅やインフラ、教育機関、産業団地、商業施設などが整備され、

まちづくりが文字通り進行中です。震災前に住んでいた一部の方々が帰還し、新たな移住者も増えつつあります。しかし、被災地の抱える課題に加えて、他の地域同様に地方部のもつ課題は残されたままです。

そのような中、専門家として、地域の資源に着目し、住民と共に構想し、実現するプロセスを『デザイン』する挑戦を始めています。まだ緒についたばかりですが、新たな取組として、建築家や都市デザイナーと連携し、地域の資源循環やエネルギー施設の将来像を描き、それをもとに対話する手法を試みました。ここで予想外だったのは、身近な話題が長期的な将来ビジョンへの議論に発展したことです。この試みを通じて、ゼロカーボンの意味を再考する機会となりました。これからも小さな試みを積み重ね、市民力を育てると同時に、専門家としての成長を目指していきたいと思っています。

### ●共に考えるきっかけに

私は、環境文明二十一が進める「今こそ、まっとうな日本の気候政策を創ろう」に心から賛同します。同時に、私はそれが実現する頃に、それぞれの地域が、市民力を発揮し、よりよい社会へと変革できるよう、『デザイン』手法を準備していきます。日本の強みが発揮される時だと認識しています。

福島県浜通りは、気候政策を考える上でも、地域の未来を考える上でも適した場だと思います。読者の皆様は、ある分野の専門家であり、一市民でもあるはずです。是非とも、現地に足を運んでください。また、ご自身のお住まいの地域に目を向けてください。共に地に足の着いた将来ビジョンを描いていきましょう。